王様狩りに行こうよっ！

閉まれドア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王様狩りに行こうよっ！

【Ｎコード】
Ｎ８２２０Ｙ

【作者名】
閉まれドア

【あらすじ】
「人は戦わなくてはいけない。」
幻影のキングという人物の発した、あまりにも曖昧で抽象的な言葉が、ネットでは持て囃されていた。
どこにでもいるようなごく普通の平凡な中学生の富士見貴則は放浪の旅の末に５年前に生き別れた姉であり、学校で『幻影のキング』と呼ばれ絶大な人気を誇っている女子生徒・富士見希乃と再会し、全力で殴り飛ばした。

これは、居場所を求め旅をしてきた少年と彼を受け入れる仲間達との友情と、勇気を奮い立て巨悪に立ち向かっていく姿を描いた正統派王道青春巨大ロボットＳＦ物語であるッ！（たぶん）

プロローグ

人は戦わなくてはいけない。
倒すべき相手は常に身近にいる。
戦いを嫌うのは悪だ。
自分の可能性を否定する事だ。
今、君は戦っているか。
戦いから目を背け、　今ある世界に妥協していないか。
もし少しでもそう感じているのなら、脱却しろ、その世界から。
叩き潰せ、その世界を支配するものを。

四日前の事だ、こんな言葉がネット上に放り込まれたのは。
そして瞬く間にこの言葉は拡散していった。
誰かがこの言葉に哲学的な深さを見出だしたのか、よくわからない何かと戦う決心をつけたのか、この言葉をネットに送り出した奴が凄いのか。
少なくとも俺はこの言葉に賛同しかねる。
倒すべき相手が何なのか、あまりにも抽象的すぎる。無責任だ。虫酸が走る。
理想的な単語を並べただけでは世界は変わらない。
この発言をした奴は幻影のキングと名乗っていた。

このハンドルネームも気に入らない。
いくら何でもネーミングセンスが酷すぎないかこれは。
こいつ、名前登録する時絶対ドヤ顔でエンターキー押しただろ。
じゃなかったら決定ボタンか、左クリックか、タッチパネルか。
いずれにせよドヤ顔だったという推測は間違いなく当たっているに決まっている。
俺はこのネーミングセンスに見覚えが、それと聞き覚えもある。
そいつがネットで幻影のキングとかいうハンドルネームを名乗り、格好つけて呟くだけで何万ものフォロワーから反応を受けている張本人だとしたら・・・とりあえず、とても痛くて世間に顔を出せないような気がする。

平日のせいか、アトゥギ市の誇る駅前の市街一帯へと向かう車はとても少ないように見える。
俺が歩いてきた田園地帯にポツンと置かれた一本のごく普通の道路を道なりに、東へ進むと丘に突き当たる。
田園地帯が広がっているような所の目の前の丘と言っても、緑の映える丘というわけでは無い。
アトゥギ市は神奈川県のほぼ中心部に位置しており、地図に載れば神奈川県の代表的な市として数えられるほどの規模を持つ市だ。
田園地帯はおろか山の中に温泉街まで持っているのだが、田舎臭さがこの市の魅力というわけではない。
俺が歩いてきた田園地帯を含む山間部、温泉街は市の北西に位置している。
北に町や県唯一の村、ダム、西には県屈指の山がある市があったりで、その影響を大きく受けている反面、市の東側には真アトゥギ駅を中心にビルやデパート、商店街などありとあらゆる物件が立ち並んでいる。
この神奈川の県央地区の市の中でもアトゥギ市の市街地はかなり栄えている方だ。

この坂を上り切ると下り坂を下った先はずっと平地となり、アトゥギ市街を一望する事ができる。
そしてこの丘のてっぺんには、ある高校がある。
神奈川屈指の学力を誇る、アトゥギ市を代表する公立校。永川高校。
この学校には裏掲示板がある。
一時期は学校裏サイトと呼ばれて全国で問題になった代物の一つだが、数年経った今でもこの学校の生徒の間で頻繁に使用されているようだ。
だが覗いてみると、その使われ方はどうもよく一般に聞く裏サイトのものとは毛色が違う。
悪口とか陰口とか、そういう問題のある書き込みはあまり見当たらない。
流石は県屈指の学力を誇る模範校だ！・・・なんて褒めるべきだろうか。
そもそも裏サイトが存在している事を咎めるべきか。
だがこの学校の生徒の大半が画面の向こう側に着目している。
ある人物が書き込むスレッドに異常な数の書き込みが押し寄せている。
一体何がこの学校の生徒の心を鷲掴みにしているのか。
何度その人物の書き込みを見ても俺には何が魅力的に感じられるのか理解できない。
発言でインターネットを賑わす謎の人物、ハンドルネーム、幻影のキング。
彼は彼の言葉全てを、この裏サイトに一番最初に載せているのだ。
裏掲示板に書き込んで、その後に別のサイトで呟く。
どうしてこの高校の裏掲示板から書き込みを始めるのかは分からない。
その理由を誰もが推測しようとするが、書き込んだ張本人の口から真意は未だに語られていない。
幻影のキング。

日本中のネットサーファーが注目する謎の人物。
ある高校の裏掲示板に最初に書く理由を推理してみるとしたら、やはりどう考えてもその高校の生徒だから・・・という理由しかない。
そして俺は、幻影のキングという言葉に聞き覚え、見覚えがある。

坂を上りきったところを左に曲がる。
すると、並木林に囲まれた緩やかな坂の先に校舎が見えてくる。
この先に、この先にその高校がある。幻影のキングがいると思われる高校が。
学力の高い学校なだけあって、正門はとても立派な構えをしている。
青く茂る並木林を抜け、校門の先に立つ学校を視界に捉える。

「ふっふっふ・・・。」

女性の笑い声が聞こえた。
校門に女子の姿があった。
バサッと広がった金髪、白と黒のセーラー服。
女子はまるで俺がここに来るのを分かっていたかのようなしたり顔で、俺の姿を目で舐め回す。
ここら辺の学校では見る事の無い、無駄に青い学ランを開いて着用した少年を珍しがっている・・・という風に見るにしては、女子の俺を見る目は感情がある。
俺の事を知っていて、探していて、待ち望んでいたような目。
その目が一通り俺を見つくして、俺の顔へと視線が戻っていく。

「待っていたぞ、富士見貴則・・・。」

女子が俺の名前を言い当てる。
こいつは知っている、俺の事を。

「ようやく辿り着いたようだな、我らの手による楽園、安住の地へ・・・。」

女子が俺に手を差し伸べる。
その後ろでは次々と生徒が校舎の窓から顔を出して様子見をしていた。
物珍しさに惹かれたのであろう、いつの間にか窓という窓は全て人で埋まっている。

「人は前に進まなきゃいけない。じゃなきゃ生きていく事はできない。貴則は生きているか？　毎日を、十代の生きるべき日々を。私は生きる。毎日生き生きしようと頑張っている。毎日元気でいたい。楽しく日々を過ごしたい。その為には・・・」

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

俺は大地を力一杯蹴り出し、右手に握り拳を作って女子へと走り出した！

「ほぅ・・・我が胸に飛び込んでくるかッ！　富士見貴則ィ！」

「どぉぉぉぉぉぉりぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

女子の頬に、拳を一発。

「ひできっ！」

「「「き、キングぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！」」」

この日、生徒達の悲鳴が学校中に響き渡った。

1話1　山菜狩り兼恋愛対策作戦会議

アトゥギ市の北西部は山が連なる山岳地帯だ。
人の手が入っている事はあまりなく、二週間前に歩いた市街地と田園地帯の境界よりも人通りが少ない。
むしろ山間部に入ってきてから車を一台も見ていない。
温泉街の入り口の紅い派手なアーチが寂しげに道路へかかっている。
そもそも平日に出入りが頻繁に見られるような所ではないのだから当たり前と言ってしまえば当たり前の光景かもしれない。
が、だとしても、今俺達が同道とど真ん中を歩いている道路は一応キョーカワ村というアトゥギとは別の行政の地域に続いているはずなのだが・・・車も人も全く通っていない。
聞こえてくるのは道路のすぐ横に流れる川の音と、俺達の声と足音だけだ。
自転車を押している男子が二人と、徒歩が二人。女子が一人で、もう一人は俺。
計四人の学生パーティが山道を突き進む。
いくら放課後だからって、制服姿でこんな山の中を歩く部活はそうそう無いと思う。
俺達は今、既存の部活動をも超える、未知の険しい活動を行っているとも言える。
・・・言ってどうする。

「・・・さて、どこから登ろうか。」

自転車を押している長髪の男、日向岡成実が右方に広がる森林を見渡す。
森林へ入る隙間を探し、程よく登りやすそうな箇所を探す。
自転車を森林の前と言えど道路の脇に何台も止めておくのは抵抗が

あるが、俺がアトゥギに来て早二週間、廃品業者や放置自転車の回収車の類を未だに見かけていない。
駅前の市街地でさえ見かける事は無かった。
こんな山の中に限って、ここぞとばかりに自転車が持って行かれるとは思えない。
まあ、こんなメンバーの中でそんな心配をしているのは俺だけだろうけど。
興味のある対象が視界に入ると、周りが見えなくなる。
小学生くらいの頃ならよくある事だが、流石に高校生にもなってそうであるのは子供すぎるのではないのか。
そしてそれに気づいて恥じるような事はしないのだろうか、ゼイ、アーは。
年上と言うより体だけが大きくなった同年代みたいだ。
だが年齢を笠に着ず、ここに来て二週間の俺に対し友好的に接してくる。むしろ馴れ馴れしい。
彼らの頭は空っぽなのだろうか。
こんな辺鄙な所に自転車を置いておいたら誰かに盗られるかもしれない、なんて事も頭の中には無いのだろう。

「よーし、作戦会議もいよいよ本番へと突入ですぜ！」

四人の中の紅一点、出縄晶が自転車を止める。

「え、こっから入るの・・・？」

「え、よくない？」

「無理じゃない・・・？」

目元を覆い隠す長さの前髪を手で横に流し、視界を開いて日向岡は

出縄に言った。
日向岡が戸惑うのも無理は無い、出縄が足を止めた所は特に急斜面であった。
山ガールという単語ができたからと言って、間違いなく人の手が加わっていそうにないありのままの山を登るような女子は絶対にいない。
てか男でもやらない。こんな森林ウォールを登るってどんな趣味だ。

「ひゅーちゃん。」

「は、はい、なんでしょう出縄さん。」

「男ならどんなに厳しい壁でも、乗り越えるべきじゃないかなっと。」

出縄が指差す方向は、やはりどう見ても急斜面。
本当にこれを登るんですか、出縄さん。

「確かに・・・。」

今回の山菜狩りの発案者である日向岡があっさりと許可してしまった！
おい男代表！　その判断はどうなんだ！？　てかお前戸惑ってただろ！

「では、今回の山菜狩り兼健全恋愛作戦会議の本会場は、こっからスタートという事に決まりましたー！　わーぱちぱち！」

出縄一人が勝手に盛り上がる。
こんな山、登れるはずないだろ・・・という空気が残りの男子三人

に流れる。
そして俺には、どうして放課後に山菜狩りをするのか、山菜狩りと恋愛作戦会議とやらを同時に行おうとするのか、というかここはもう学校からかなり離れているんだけどとか、こんな所で恋の話なんてする必要無いだろとか、異論ばかりが浮かび上がる。
言葉にするのが面倒だ。こいつらは本当に高校生なのか。これは高校生の発想か。
そもそもこの恋愛会議、メンバー的に成立しないだろうと先ほどからずっと思っているのだが、主催者の日向岡は分かっているのだろうか。
肩まで伸びているほどの髪を持つ彼の頭は、恥ずかしがり屋の表情を守るには持ってこいの量だ。
中学の頃からずっとこの長さを維持しているらしい。
生意気にもYシャツをズボンから出しているが、不真面目な生徒と言うよりマヌケそうな三枚目としか言い表せない違和感が彼から出ている。
しかも不良っぽさを演出しようとしている割には、趣味は山菜狩りときた。
特技は山の幸をふんだんに使った料理。家庭科の時間はいつも彼の独断場らしい。授業を一人で独占すんなよ。
そんな日向岡が健全恋愛作戦会議の発案者であり主役であるのだが、こいつが好きなのは出縄だ。
出縄の前だと日向岡は何気ない日常の会話でさえもテンパってしまい、気の利いた切り返しもできなくなる。
セミロングで前髪パッツンの髪型から繰り出される、毎日クラスを騒がす眩しい笑顔（本人談）の前では日向岡はイエスと言うだけの機械と化してしまうのだ。
なんで好きな相手を会議に入れているんだよ。それもう会議にならねーだろ。会議するなら告白しろよ。
で、もう出縄が勝手に石垣をよじ登って斜面を登ろうとしている・・

・誰か止めないと三歳がリの最中にパーティが全滅するぞ。

「待てよ出縄、自転車に鍵ぐらいかけとけよ。」

俺、日向岡に次ぐパーティ三人目の男子、万田耕太郎が一人暴走する出縄に待ったをかける。
おそらくこのメンバーの中では俺の次にマトモなんじゃないかと見ている。
背高のっぽで周りより物が見えるからか。だけど性格は中学生の頃のを引き摺っているような感じだ。
物事に対し斜に構えて批判的な評価を下す。
だから日向岡みたいに出縄の言う事にイエスと言わず、物事を割としっかりと判断できる。
日向岡のいいストッパー役だ。
ストッパー役の癖に山菜狩りを止めなかったけど。

「鍵ぃ？」

出縄が振り返って聞き返す。

「大丈夫っしょ。私達の学校のシールが張ってあるチャリをパクる勇気がある人なんて、この辺でいるはずが無いよー。」

「一理ある。」

「ねーだろ。」

日向岡のイエス癖がまたも起きている。なんだお前、高校を何だと思っているんだ。どこの勢力と戦っているんだ。
「森子様の威を借りるってか。」

万田は特に肯定も否定もしなかった。
出縄の言う事は高校生や中学生、年の近い相手なら実際には間違っていない。
俺達の学校には撫子原森子という女子がいるのだが、彼女の存在は隅々まで、アトゥギ市の学生にその存在を知られている。
見た目はとても小柄で、子供っぽくて可愛らしいのだが、何故か常に長袖で、何故か常に背中に剣を背負っている。
授業中も食事中も常に背負っている。第一印象は子供のような可愛らしさよりも、肩からはみ出た剣の取っ手の部分に目が行った。
都会の女子高校生は怖いなと俺は思った。
いつも生徒会長のイケメンボーイな板坂間と行動していたり、学校で誰もが様付けで呼んでいたりと、学校で最も意味不明な人だ。
それで更に他校の高校生と何度かいざこざを起こした結果、彼女を現代に生きる侍と慕う舎弟が何人もできたという。
いや、侍なら腰に剣差せよ。いや、差すなよ。どうして剣を持っているんだよ。

「森子様は強いからなー。確かこの前は窃盗グループを一人で壊滅させたんだっけ。」

「現行犯の所を、スパッとな。」

「流石は現代に生きる侍だよな。」

男子勢の会話がおかしい。撫子原森子って一体何なんだよ。
まだ俺は森子様とやらの活躍を目にしていない。
いつか俺も彼女を現代に生きる侍と崇める事になるのだろうか。
都会の学生は怖いなと俺は思った。

1―2

「てな訳で山登っちゃいましょー！」

出縄は再び石垣へ手を伸ばし登ろうとしていた。

「待てよ出縄。」

「おや、どうかしたかい？　貴則君。」

仕方ないので俺が出縄の暴走を止める事にする。

「お前がどうかしてるわ。こんな場所マジで登る気かよ。」

「自転車なら大丈夫だよ～。」

「そっちじゃねーよ。」

「森子様のご加護があるから！」

「森子様神様かよ。」

「ぶっちゃけ守り神みたいなもんだしね。」

「ご加護の前に自衛を徹底しろよ。」

「全く、貴則君はお節介ですねぇ。おっかあは、そんな風に育てた覚えはありませんよ。」

出縄が石垣から飛び降りる。制服を着ているのにその動きは軽快だ。
俺は俺で学ランの内ポケットに物を入れすぎていて、この格好で走るのは避けたいなと思う。
日向岡達だって着ているのはブレザーだけど内ポケットがあるのだから同じ思いを共有しているはずだが、なんで山の中で山菜狩りなんてやろうとしているのだろう。

「おっかあとかじゃなくて、お前とは故郷も学校も違うわ。」

「残念、騙されなかったか。」

騙されねーよ、じゃなくて何言ってるんだよ。

「そういえば貴則がここに来てから、もう二週間経つんだよな。」

「ああ、そうだな。」

ぽっと出てきた日向岡の言葉に適当に相槌を打つ。
こいつらの学校に殴り込みをかけて早二週間。
俺は幻影のキングこと富士見希乃を全校生徒の前で殴り飛ばした訳だが、どうした事か、俺はこの学校のクラスに入れられ、教室に住む事になってしまった。
何を言っているのか分からないだろうが俺もよく分かっていない。
残念ながら俺の姉である幻影のキング、富士見希乃は何故か学校の教室の一つにソファーやらテレビやら私物と言うには大きすぎる物を数多く持ち込んで占有している。
希乃と同じクラスである日向岡、万田、出縄達も放課後になるとその教室に入り浸り、時には寝泊りまでしてしまう。
現にこの二週間の内に何度かあった。学校に泊まるっておい・・・。
永川高校における富士見希乃の存在というのは異様なものだ。

幻影のキングと名乗ってネット上でよく分からないお言葉を発信したりしているが、その影響力はネットよりむしろ学校の方が大きいみたいだ。
永高において二年四組の富士見希乃は生徒からの注目がとても多くてイケメンボーイの生徒会長よりも人気があり、学校を代表するスターだと自分で言っていた。
あとから生徒会長本人に聞いてみたら彼も希乃の言う事をそうだねと肯定していた。
生徒会長は希乃達よりも学年が上のはずなのだが、生徒会のはずなのだが、何故か放課後になると希乃達が占有している教室に撫子原と一緒にいたりする。
それでいいのか生徒会長。
だがあの生徒会長にしてこいつらあり、とも言える。

「最初はキングルームにいるのも嫌だって言っていたのに、いつの間にか馴染んでるよな～。」

「まず学校になんか住めるかよ。」

家出中で住む場所が無いから学校に住めって言われたら普通に引くだろ。

「え？　学校に皆で寝泊りするの楽しいじゃん？」

石垣に肘をかけた出縄が言う。

「そういうのは付き合いの長い友人とやる事だ。」

いくら好きな事でも試合とかじゃない限り、どこの馬の骨か分からない奴と一緒にやってもあまり楽しくない。

修学旅行なんてのが丁度良い例だ。
小中高で三度あるであろう一大イベント、修学旅行。
今のところ俺は一度しか行っていないのだが、毎年、一番多い時は月一という頻度で転校を繰り返していた俺は修学旅行に良い思い出が無い。
修学旅行以外も良い思い出よりも嫌な思い出の方が比率的に多い。
小六の時の修学旅行は二学期に転校して早々の出来事だった。
誰とでも打ち溶け合える小学生と言えど、六年生の二学期に転校となると、既存の輪に入りづらくなる。
物事を深く考えるようになる代わりに、昔みたいに誰が相手でも隔たり無く接する事ができなくなる。
当時の時点で俺はその例に当てはまっていた。
とってもナイーブな時期だった。
自分が可愛くて仕方が無かった俺は他人の言葉にいつ攻撃されるか、いつ冷たく接されるのか、気が気でなかった。
不用意な言葉で敵意を引き出してしまう事を恐れ、俺は消極的であった。
その結果、班決めや部屋決めで盥回しにされ、修学旅行に行く前から傷つく事となった。
こんな奴いらない。こいつのせいで班がバラバラになる。一人ぐらい人数が多くてもいいじゃないか。5人班じゃなくて6人班がいい、それが駄目ならこいつを受け入れない。
教師と争うクラスメートの姿を、俺は椅子に座って何十分も眺めていた。
閉じっぱなしの口の中で言葉にできない憤りが充満していた。
彼らは俺の事をクラスメートではなく、ただいるだけで邪魔な存在だと俺の目の前で、背後で、隣で言った。
教師は教師で、クラスに馴染めない俺の性格を責めた。
恥ずかしいのは分かるが、友達と仲良くやっていけないとこの先必ず苦労する。

その性格を直さない限り君は大人になれない。
君みたいな恥ずかしがり屋は大勢見てきたが、大人になる為に皆自分を変えていった。
大人に恥ずかしがり屋はいない。もしもその性格のまま社会の荒波に飛び込んだら間違いなく自然の摂理によって淘汰される、と。
俺にこのような事を言った教師はこいつで４人目だった。
先生の言う事、大人の言う事はちゃんと守るべきだと教えられてきた俺だったが、この頃にはその教えに疑問を抱くようになっていた。
俺は教師と教室の隣の倉庫の中にて一対一で一方的に説教されていた時、口は開かず、じっと頭上の教師の目を見ていた。

1―3

口を開かない分、目に感情が偏る。
ぶつけるべき相手が分からない俺の感情は目に表れていた。
人に責任を擦り付ける口煩い大人の一方的な言葉は俺をとことん逆撫でた。
いじめは良くない事だと、どこの学校に行っても教師は皆言っていた。
そして俺に対する当たり方も、どこもこんな感じであった。
一応小学三年生の頃までのは除外だ。ホントに小さい頃は友人ぐらい作れた。
出来てもすぐ転校なんてパターンが殆どだったが。
転校先のクラスと噛み合わなくなったのは小五ぐらいからか。
悩んでいる事があったらいつでも言ってくれ。先生は貴則君の味方だよ。
恥ずかしがらずに勇気を出してごらんよ。皆良い子だよ。
皆、貴則君と遊んであげてね。良い子だから。
どうしてお前はいつも仲間外れなんだ。友達は作らないのか。
休み時間、一人で過ごして楽しいか？　自分から輪に加わらないと。
どうして人と仲良くできないんだ。お前に原因があるんじゃないか。
いじめってのは、いじめられる方に原因があるんだ。いじめの原因はいじめられる方だ。

修学旅行の時のクラスでも、同じ事を言われる事となった。
俺と同じ班になった奴は徹底的に俺をシカトし始め、急に気が変わったかと思えば言葉の暴力を働き、仕事を押し付け、俺は精神的に追い詰められた。
小学生の時点で茶髪に染色していた奴が特に、事ある毎に俺に因縁を付けてきた。
そのきっかけというのが女子絡みだったというのが何とも小学生らしい。
今となってはいい笑い話になっているだろう、あの茶髪野郎の中で。
あの学校の時は珍しく女子の友人が出来て修学旅行に微かな希望を見出していた事もあったのだが、茶髪ＤＱＮに見事に台無しにされた。しょうもない。
修学旅行に限らず、放課後のちょっとした集まりでも気の良い友人達だけで行ったとしたらさぞかし楽しい事だろう。
が、普通の生活を送っている日向岡達はそんな事は気にしていないし思いつきもしない。
こいつらにとって、毎日友人と遊ぶ事はごく普通の事だ。
だから友達と遊ぶ事の有り難味をそれ程意識していない。
だけどそれは悪い事ではない。意識するようになってしまったら友達を純粋に見られなくなるかもしれない。
友人を自分の日常を充実させるアイテムとも捉える事ができてしまう。
そんな捉え方をしてしまったら日常が気が気でなくなる。
捉え方を忘れる事も中々できない。頭に染み付いてしまう。

「でも貴則君はお姉ちゃんという友達の垣根を超えた人と毎日寝泊りじゃん。」

「何が悲しくて実の姉と家ですらない所で寝泊りしなくちゃいけな

いんだ。」

「あ、ごめん・・・。気に障った・・・？」

ハッと出縄が我に返ったかのように表情を変えて訂正する。

「家の事は気にしなくていい。姉と寝泊りしなきゃいけない事について謝れ。」

「え、えー・・・。」

現在家出中の俺には住む場所が無い。
両親が他界した俺は少し前まで施設で暮らしていた。
施設に移ってから転校はしなくなったものの、俺が学校に馴染む事はまたもやなかった。
学校が気に入らなかった俺は旅に出る事にした。
なんだかんだで転校を繰り返して学校を巡るのも、今となってはアリだったかなと思う自分がいる。
どこの学校も、生徒も教師も気に食わない奴らばかりだった。
だが次は、次こそは良い学校だろうと転校する度に微かな希望を抱ける。
学校はどこも居心地が悪かった。
ごく一部と一時期を除いてほぼ全てが居心地の悪い所だった。
俺がこの学校に来たのは幻影のキングという名前の奴がこの学校にいると思ったからである。
中学生でさえもその統一性の無さに呆れてしまうネーミングセンスには覚えがあった。
遠い昔は、小学校低学年の頃までは父と母、そして姉である希乃と、ちゃんとした家族の形で暮らしていた。
そしてごく普通の家族関係だった。姉と弟で漫画やテレビ争奪戦な

んて微笑ましい光景も日常茶飯事だ。
希乃は年上というアドバンテージをふんだんに使って幾度も俺を敗北へ追い込んだ。
結果、希乃は漫画とテレビの影響を若くして大きく受ける事となった。
人格は早熟な成長を果たし、小学生の時点で中学生レベルに匹敵する趣味を会得した。
しかしどうした事か、あれから5年経ったはずなのだが希乃はそれから成長していないように思える。
高二の女子が幻影のキングを名乗るってどういう事だよ。
せめて幻影の王とか主とか盟主とかで満足しとけよ。
周りもノリノリで呼んでるぞ。一体いつからキングと呼んでいるんだろう。
学校の教室を勝手に占拠して、全校生徒からキングと呼ばれて、なんか勝手に目立っていて。
残念ながらこれが俺の姉だ。
小学三年生のある日の朝、父と一緒に蒸発したきり二週間前まで一度も会う事が無かった俺の姉だ。
蒸発したと気づいた日、家から二人の姿だけが消えていた。
二人がいないだけで、他は何も変わらない家。
だけど俺には二人がテレビや机なんかとは比較できない、とてもとても大きなど真ん中に位置するべきピースを失ったように思えた。
パズルの癖に一枚の大きさが均等じゃないなんて、これじゃあ壁に飾るなんてできないじゃないか。
こんなのは絵じゃない。絵として認められない。
その後、収入を失った母に連れられて俺は日本を転々とする事になった。

1―4

「なんと辛辣な・・・それ聞いたらブラコンの王様が泣いちゃうぜ。」

日向岡がニヤケながら俺へと視線を持っていく。

「いや、最初からずっと泣かすような言動ばっかだろ。」

万田の訂正の通りだ。

人に黙って消えておいて、ようやく見つけたと思ったら校門前でふざけていた残念な幻影のキングを殴って修正。

しかしそんな生易しいやり方では治らないのが幻影のキング。

教室を占拠しているだの、そこに住めだの、お姉さんと一緒に二人暮らしだよー・・・だの、とんでもない姉だ。

一方的で我が侭な姉だ。

そんな姉と、姉が牛耳る学校で暮らさなきゃならない。日本放浪の旅に終止符を打って。

あの日、希乃が消えたのを境に俺の人生は大きく変わった。

「あんなに希乃キングは貴則君の事好いてるのにねぇ。良い姉弟関係だと私は思うよ？」

「好き方がおかしいだろ。」

出縄は俺の返答に不思議そうな顔を覗わせるが、いや、どこが良い姉弟関係なんだよ。

どう考えても異常だろう、希乃の行動は。

「なんたって希乃はキングだからね。」

「キングで許容すんな。」

「キング級の愛だよ。」

「重すぎるわ。キング級に迷惑だ。」

一歩ずつ、段々と出縄が俺に近寄って来ている。なんだその妙な笑顔。

「キング級に仲が良いって事じゃん。」

「それはキング級のこじつけだ。」

「じゃあさ、どーしたら貴則君は希乃キングと仲良くするわけさ。」

「とりあえず距離が近い。」

なんで鼻と鼻がぶつかりそうなぐらいの距離まで近づいて直立で真正面に立って顔を合わせてるんだよ！　この距離で何その笑顔！？

中学二年生と高校二年生だが出縄とは身長差があまり無い。俺の方が低い、という訳ではない。あくまでも身長は同等だ。女子に劣っているはずがない。

若干出縄の視線が高い気がするが、きっと気のせいだ。

「希乃キングとの距離を表わしてみました。」

「キング級の一方通行だ！」

「駄目だよ、そういう突っぱねた言い方。」

デコピンがパンッと額に当たる。

「こんだけ迫られたら普通逃げるだろ。ＤＶだ、圧迫式ＤＶだ。」

「言葉の暴力の権化が言うか。」

万田が横目で俺と出縄を見てボソリと言った。
男子と女子が超近距離で向かい合ってる状況にツッコミを入れる訳でもなく、あきれ返っている様子だ。できればツッコんでくださると助かります。

「いい加減離れろ。」

仕方ないので自分から後ろへ下がる。

「意識するの遅すぎじゃない？」

「何をだよ。」

「異性をだよ。」

「だから近いって言っただろ。」

「感想それだけー？　まさかお姉ちゃんと暮らしてる時もそんな感じなの？」

「まさかって何だよ。」

「お姉ちゃんと二人きりで夜を過ごすんだよ？　それは青春以上のロマンチックになるって決まってるじゃん。」

目を輝かせて、なにやら何かを期待しているようだが・・・こいつは二人きりで学校で生活させられるという事を何だと思っているんだ。
あんなじゃじゃ馬に今も昔も人生を左右させられ続けているんだぞ。
今更どういうつもりで俺と接している。
あいつの無邪気に笑う様から罪悪感みたいなものは感じられない。
それがとてもむかつく。

「気持ち悪いわ。」

「・・・なんというか、まさか貴則君って恋愛会議にとっても不向き・・・？」

「第一興味無いし。」

俺がこの場にいるのも日向岡と万田に無理矢理連れてこられたからだ。
俺がいる必要性が分からない。年下に相談してどうするんだよ。
くだらない、とてもくだらない。
放課後に人気の無い山の中へ山菜狩りだの恋愛会議だの。
俺が来てから二週間、こいつらは毎日毎日くだらない事ばかりやっている。
誰かが何かをどんな小さな声でもボソリと呟けば、誰かがそれを聞き取って共感して、やがて教室中に言葉が循環し、幻影のキングへと届く。

そして学校の王様が宣言するのだ、朝から放課後まで全力で教師から逃げ続ける鬼ごっこだとか、第二次スーパー購買大戦開戦だとか、野球大会だとか。
学校の秩序を壊して自分の意のままに動く。
俺が今まで巡ってきた学校のどこでもそういう人間は何人もいた。
教師の存在と、目の前で行われている授業を無視して別の事をやり始める。
彼らは授業が行われている教室にいるにも関わらず、さも自分には関係無いかのように教科書を閉じ、椅子から立ち上がり、沈黙を平気な顔で破る。
注意する教師に彼らは言う。
他の人に迷惑はかけていない、と。自己責任で俺は動いているんだ、と。
そういう奴というのは大体、普段日頃で存在自体が迷惑な奴だ。
人の何気ない行動を、時には正しいはずの行動を軽蔑の対象とする。
奴らには正しいか間違っているかという価値観は無く、面白くなるかどうかで言葉を発する。
自分が間違っているという思考には絶対に辿り着かない。
そういう土俵に立とうとしないから、どう批難されようとも彼らは関係が無いように振舞う。
自分へ非が届かないようにする。最低だ。
こいつらは少しズレているが、それでもやってる事は生徒としての義務の放棄だ。
授業の放棄はごく偶にの話だが。いや、二週間に一度あった時点でそれは偶にではないか。
俺が今まで見てきた奴らのように悪意があるのか周りが見えていないのか判断に迷うが、問題児だという事に変わりはない。
それもクラスのごく一部の人でなく、幻影のキングを中心として全員が彼女に巻かれる。
一人の問題児の行動をその場で批難せずに見て見ぬ振りをするより

も性質が悪い。
事なかれ主義、周りに合わせる主義、空気を読む主義。他を尊重し、個を蔑ろにする雰囲気。
だが時には忽然として個を主張し出す事がある。主に、上の立場の人間に対して。
実際のところ子供に主義主張なんてものは存在していないのだろうと俺は思う。
だから俺はそういう奴らとは違った存在として立ち振る舞う事に、小学五年生の頃に決めた。
物事の善し悪しを判断しようとせず周囲を試みない利己的な行動を取り、弱者を助ける力があるはずなのに力を使おうとしない、変化を起こさない生活の仕方に俺は苛立った。
目の前にいる人が苦しんでいる、寂しい思いで過ごしているのを見ていながら分かっていながら助けない。そして後になってドヤ顔で勝手に述懐するのだ、あいつは今頃どうしているのかな、元気にやっていけてるのかな、と。
俺は周りがどうであれ堂々と行動する事に決めた。
堂々としていれば休み時間に一人でいても、宿題を学校でやっていても、本を読んでいても何もおかしな事は無い。
ボーッするのも宿題をするのも本を読むのも誰だってする事だ。
した事が無い人はいないだろう。他人に合わせてばかりいたら何もできなくなる。
俺の通った学校はどこも善悪を考えない奴らと何もしない奴らしかいなかった。
そんな奴らの中にいるのは息苦しくて辛かった。
俺にとって奴らは仲間ではなく敵だった。存在しているだけで害悪だった。
奴らの俺を見る目には悪意が感じられた。
ならば俺は戦わざるを得ない、敵に負ける訳にはいかないのだから。

1―5

「大体お前らが勝手に俺を連れてきたんだろ、こんな山ん中に。これじゃまるで拉致じゃねーかよおい。」

「え？　拉致ったつもりだったけど。」

日向岡が迷わず即答！？

「身勝手すぎるだろそれ！」

「だって貴則だしね。」

「その一文に納得できる要素があったのか！」

「大丈夫、貴則なら通用するさ。」

「何にだよ！」

無理矢理入った山の中の森林には薄っすらと獣道が幾つか通っており、思った以上には登りやすかった。
生い茂った木々は空の色をも遮り、白い光が青色を塗りつぶしている。
獣道の脇に生えた草は様々な種類が膝どころか腰まで伸び、獣道に垂れかかっているものもある。
草を足で押しのけて突き進んで何処か分からない所へ登る。

登りながら雑談し、頂上に着くか何か見つけたりしたらようやく来た道を引き返し始める。
俺は毎回この山登りから生きて帰れるのかという不安に襲われる。
登るべき場所じゃない所から山を登って道なき道を歩かされるが、俺達が進んでいく道には格別珍しい人工物は見当たらない。
森へタイヤやらブラウン管のテレビやらが不法投棄されている様はよく見る事がある。
だがこの山には人の手が入った気配が無い。
日本語が一切書かれていない、アラビア語とか韓国語とかみたいな英語とはかけ離れた形の文字で埋め尽くされた本を読まされている気分になる。
もし今歩いている道の脇に色褪せたデスクトップパソコンが放置されていたとする。
そのパソコンは会社が倒産して備品を売りに出そうとするも型があまりにも古すぎた上に長い間放置していた為に値が付かず廃棄を業者に頼むのも金の都合で断念、車に積んで夜中らに山へ登って逃げるように捨てた・・・
なんて灰色な話も想像できる余地があるのだが、この森林からは人の言葉で理解できなさそうな雰囲気が漂っている。
この生い茂る森を見ても特別な思いや物珍しさがあまり沸いてこないのは人の手を離れ勝手に生えている木と、目的を持って作られた人工物では人工物の方が親しみがあるからだ。
草花よりテレビ、ラジオ、パソコンなんかの方が数倍見慣れている。
ただ森林の中を歩くだけでは同じような光景が続くだけで変化が無い。森林の中に人工物というイレギュラーがあるからこそ特別な物を見つけた気分になれる。
街の中で木を見ても特に何とも思わないのだが、森の中で見つける人工物には特別な感情を抱ける。
人の手の入ったまともな道の無いこの山の中で今、重なり合って視界を遮る目の前の木々の先に古ぼけた茶色い小屋が、くすんだコン

クリート色の建物が、見えてきたとしたら俺はこのメンバー達と競走する勢いで不自然な建築物に入ろうとするだろう。

住んでいた学園を抜け出してからは人目の付かなそうな所を探して野宿をしていたのだが、陽が沈みかけ始めた頃にまず最初に探すのが建物の廃墟であった。

元病院だったり放置された民家だったり廃校成り立ての一見ごく普通の校舎だったり、住宅街の真ん中にある物があれば山の中にひっそりと一般的に想像し易いセオリー通りに建っている物もあった。

建物は雨風をしのげる上に放置された民家ならば他人が入ってくる事はほぼなかった。

廃校や廃病院でも部屋の数と広さがあったので見つからずにやり過ごせた事も多かった。

侵入者は常識知らずの荒くれ者と言っても年が近い少年や変わり者が殆どで危害を加えられた事は無かった。面倒な相手だと思った事は何回かあったが。

真夜中に初めて集団で囲まれて起こされライトを当てられた時なんかは心臓が緊張でガチガチに固まった。６人ぐらいいただろうか、そいつらは髪を黄土色や茶褐色に染めているような奴らであったが、今まで出会った学校のクラスよりは好感が持てた。

俺は全国を旅している、色んな村とか廃墟を巡ってきたと話したら彼らは目を輝かせ喰いついてきた。彼らは初めて廃墟に入ったと言っていた。

住宅街の外れの道の脇の森の中に建っていたコンクリートの建物は地域でも有名な場所であったが街灯もろくに無い道の上に黒い噂が絶えないらしく、不良でさえも殆ど訪れる事は無いという。

どうりで廃墟にしては形がある程度残っているなと俺は思った。

俺は人気を避けるように裏口から入ったせいか、コンクリートの素っ気無い建物という印象を持っていたがどうやらどこかの資産家が立てた洋館だったらしい。

ああ、あの建物は俺が訪れた中で一番立派な廃墟だったな。
誰が寝ていたか分からないベッドに寝転がるのは流石に気が引けたのでやらなかったが、あの夜は6人の少年達と大分話しこんで楽しかった。
あいつらは浪漫というのが分かっていた。
今まで俺が通ってきた学校の奴らは男心を擽るような経験に自ら飛び込むような事をしないんだろうなと思った。
彼らは見た目と違って純朴さを中に秘めていた。
学校の奴らは排他的で冷めていて特徴が無い奴らだった。
この森の中で廃墟の洋館を見つけたとしても興味を示さないんだと思う。
あいつらは何を楽しみに生きているのかよく分からなかった。

1―6

「貴則―。」

「ん。」

前を歩く日向岡が俺に話を振った。
山菜狩りというのは言葉だけで、メンバー達は日向岡の惚気話を聞いてばかりである。
日向岡は好きな女子が近くにいるのだが、友人から恋愛の対象へステップアップするにはどういう風に接していけばいいのかと聞いてきた。
好きな女子が近くにいるというのは一字一句文字通り合っている。
日向岡のすぐ目の前を歩いている。出縄、日向岡、万田、俺という順でメンバーは山をダラダラと登り続けている。
この中で山菜に興味があるのは日向岡ぐらいしかいないのだが、当の日向岡本人も話している内容は専ら山とは関係の無い話だ。
山菜狩りなんて名ばかりで、これは日向岡による出縄との距離を縮める為の作戦なのだ。

「貴則って恋をした事ある？」

「特には無い。」

「ダウト！」

「馬鹿らしい。」

「馬鹿でも一途ならカッコいいじゃない。」

「なら勝手に告って傷ついて死ね。」

「告白したら致命傷ぅ！？　なんでフラれる事が前提なんだぁ！」

「ひゅーが、勝算はあるのか。」

万田が日向岡に聞いた。聞いてやったといういい加減な言い方だった。

「しょ、勝算って、恋愛感情をそういう言い方で表すのはどうなんだ。」

「で、告ったら受け入れてもらえると思うのか。」

「・・・。」

万田の問いに日向岡は沈黙した。

「だから、評価をグンと上げる為に皆で会議するんでしょ？　大丈夫だよひゅーちゃん、そういう事ならこの私に任せっなさい！」

日向岡に助け舟を出すかの如く、出縄が胸を張り軽く叩く。

そんな振舞い方をしてもここにいる奴らは誰もお前に頼らねーよ。

「うん、頼りにしてるよ出縄さん。」

日向岡は言ったが万田は無言を貫いた。言葉にするまでもないしな。

どう頼りにするつもりなんだよ日向岡は。

「ひゅーちゃん的にはさ、あとどれぐらいの距離だと思ってる？
好きな子との距離。」

「え、ああ、結構な線は行っていると思うんだけど。」

ええ、限りなく近いですよ今現在。

「そんなに行っているならもうあと一息じゃん！　ゴーンと行っちゃえばいいのに！」

「いやー・・・」

「何か不安な要素でも？　でも相手の気持ちを完全に読める人なんていない訳だし。
まあ告白ってカードは一発切りしか使えないから何か別のクエスチョンを出してみればいいんじゃないかな、告白に近い何かを。」

「告白に近い何か？」

「とりあえず抱きついてみろ。」

万田が会話に割り込んだ。

「捕まるわぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「はっ！　相手がＯＫを出せばそのまま告白のラインを飛び越えられる・・・！？」

しかし出縄が感化されてる！？　告白よりハードル高いだろそのカード！

「確かに飛び越えてるけどそれは違う方向だぁぁぁぁぁ！！！」
珍しく日向岡の出縄に対するイエスマンモードが解除された。
「いや行けるよひゅーちん！　男はグイッと強引に女の子をリードしないと！　っていうのが流行りらしいし！」
「抱きつくのが流行！？」
「近頃は草食系男子だなんて言葉がテレビ新聞など大衆社会で踊っている世の中だしね、つまりはそういう事なんじゃない？」
「じゃあちょっと日向岡に抱きついてもらえよ出縄。」
また万田が言った。
「え、ええ！？」
当然、出縄は困惑の表情を見せる。
「お、ちょ、え、ぐぅ？　何言い出すんだよ耕太郎！」
日向岡が足を止めて後ろへ振り向き両手を上げる。
出縄と万田も足を止め、最後尾の俺も少し距離を取って止まった。
「さあ、肉食男子へと昇華する時だ。」
「それは肉食じゃなくて変態だ！」

「なら一生草でも食ってろ！」
「変態か草食うかの二択かよ！」
「ああセクハラか草食うかの二択だ。」
「やっぱ変態なんじゃねーか！！」
「ふっ、だからお前はいつまで経っても日向岡なんだよ。」
「俺はいつまでも日向岡だわい、あと勝手に人の名前を不名誉的な名詞にするな。」
「仕方ない、ここは互いに同意を得た上でやってみるしかないか？」
万田が振り向いて俺に振る。自分から提案しておいてなんで疑問系なんだよ。
「勝手にやってろよ。」
あまりにも馬鹿らしいので投げやりに答えた。
「うわあ！　貴則君まで良識を失ったぁぁぁ！？」
「という訳だ出縄、肉食系が好きなんだろ？　なら」
「わ、私は例外で！　例外で、お願いします！」
出縄が大慌てで両手で万田を制した。
まあ、そりゃそうだな。

日向岡が萎むように視線を下に落としたが、好きな人に抱きつくのがＮＧと言われたら現実的な方法ではないにしろ確かに俺も落ち込むかもしれない。
いきなり抱きついたりなんかは絶対にしないだろうが。

「そうかい、それは残念。面白いと思ったんだけどな。」

「人で試そうとしてんじゃねーよ！」

「そうだよ、悪ふざけはいけない事だよね。」

悪ふざけはいけないけど賛成してただろ出縄。
軽く息を吐いて間を空ける。

1―7

「うん、やっぱ急に抱きつくのは無しだね。ビックリするもん。」

出縄が男性陣へ再確認するみたいに言った。

「それじゃあ何か他の案を。」

「男は黙って直球勝負だ。」

「黙れ耕太郎。何か出してよ貴則。」

日向岡が俺へとパスを出す。

興味が無いと何度も言っているのにこれだ。人の話ぐらい聞けよ日向岡。

実際に俺はそんな経験を積める程の余裕がある人生を送ってきていない。

幾つものクラスから何回もハブられ続けてきた俺が他人へ恋をするなどそんな余裕が一体どこにあったというのだろうか。

出会いだなんてとんでもない、俺はいつも置物だった。

初めての会話も初めてという特別さを持っていなかった。

俺という存在は置物として固定されていたからだ。

例えこっちに話す意思があったとしても、相手には自発的に置物と話す気なんて起きるはずもない。

置物と会話をする人はいない。

置物はただ遠くから眺めるものだ。

置物について何を思おうが言おうが誰も傷つかない。

置物を気にする必要は無い。

「だから無いって。」

「あのなぁ貴則、中学生ってのは多感な時期なんだぞ。」

「お前の中学生の頃を例に出せ。」

「お前と俺じゃ比較にならないだろ。」

「ああ、お前がモテているケースなんか想像できないしな。」

「俺は別に不特定多数の女性にモテたいって訳じゃないんだよ。」

「そんなのお前の見た目で丸分かりだ。」

ボーボーに伸ばした髪で見た目を気にしている癖に気は小さい男となれば、チャラ男という基準より更に下に見られるのは当然である。自分を格好良く見せたいと思う奴は大体この年だと整髪剤なり、行き過ぎた餓鬼になるとピアスなり髪を染めたりして自己主張を行う。あのいつしかの金髪野郎みたく。

「数多の土地を渡り歩いてきた貴則なら・・・貴則なら俺に文殊の知恵を授けてくれるはずっ！」

「行く先々で女性を口説いて回っていたみたいな完全なるでっち上げの虚実をばら撒いて変な期待を抱くのは止めろ。」

「でもさ、恋沙汰とか一つぐらいはあっただろ？　あるだろ？　じゃなきゃ将来旅をする時に夢が持てないじゃん？　旅をすれば出会いはあるんだろ？」

「普段冴えない奴が旅行ったってモテるはずないだろ。普段からモテてないんだから。」

「なんと、夢も希望も無い話だな・・・。」

実際に行動に移すのが難しい物事に対し幻想を抱く。
午前二時に薄いリュックサックを右肩にかけて非常口の緑色の明かりが不気味に、ここぞという場面なのにしんみりと照っている廊下の真ん中を歩いた時の俺も旅というものにはあこがれを抱いていた。だがその時の俺は意外にも緊張や興奮の念を抱いていなかった。寮を抜け出したその時まで俺は誰一人にも旅に出る事を告げなかった。
黒い学ランを着て真夜中に外へ出ようとするような子供は何か変な事を考えていると誰が見ても怪しむに決まっているので不用意に音を出さないようにするべきだと頭に入れてはあった。
しかし何故か俺は微かな足音と服が擦れ合う音が出ても廊下を歩いている時は気にしていなかった。気にならなかった。
音が出ているのは聞こえていたのだが俺はそれが頭の中に一旦入って行ったのに関わらずどこかへ流れ出てしまったのか、俺は歩き方を変えるのも歩く事を止めるのもせずに玄関へと向かった。
歩いている最中は廊下に誰か出てくるような気配がずっとあったのだが、俺は見つかるかどうかよりも早く出て来いと身構えていた。
胸が締め付けられるような感覚が無かったという事に気づいたのは寮を見下ろせる丘まで走ったからであった。
寮の門の横のフェンスをよじ登り住宅地の階段を駆け上って、一休憩取ろうと丘の上公園という所で寮を見下ろして初めて自分が異常に落ち着いた気持ちになっているのに気づいた。
あの寮で暮らしていたのはたった3ヶ月程度で、寮の周りの街を見下ろしたのはこの時が初めてであった。
周りは音一つ聞こえず静かだったのだが俺の息遣いと衣服の擦れ合

う音は収まることは無かった。
足音やドアを開け閉めする音、日常生活の音より目立っていて誰か一人ぐらいと言わずに誰でも気づいていいだろうと思ったのだが結局誰にも気づかれないまま俺は寮から脱出できてしまった。
ひょっとしたら誰か一人か二人が俺の姿を脇からジッと見ていたのではないかと勘繰り少し背筋が冷えたのだが何かが起こる事はなかった。
静寂に包まれた住宅街にその日起きた異変は俺一人による逃亡劇だけであった。
観客は誰もいない。気づいた頃には俺はもう舞台にはいなかった。
いざ舞台に勇み足で立ってみはしたが思った以上の緊張も喜びも味わう事無くあっさりと幕が閉じてしまった。どうしようもない遣る瀬無さが俺の捻れた神経をゆっくりと解した。

1―8

「俺だったら人との出会いを大切にしながら田舎町を巡っていくね。お爺ちゃんお婆ちゃんと田んぼで会ったりとか、田舎に泊まるとか。」

日向岡は分かっていない。
手の届かない世界は距離がありすぎて人には正しく想像をできない。
心の中では既に自由気ままに田んぼの広がる田園地帯を口笛吹きながら歩いている姿を想像しているんだろうな、こいつ。
アトゥギの田園地帯なんかとは比べ物にならないような壮大さのある場所はいくらでもある。
言う人は言う、アトゥギの田園地帯は凄い良い場所だと。
だが俺はそれよりも凄いと感じる景色の田園地帯を幾つか目にしている。
日向岡はそんな広い田園地帯を空想の中で歩いている事だろう。
見慣れてない人からすればアトゥギの田園地帯でも十分良い光景だと思えるだろうが、それでも見慣れた景色を超えるものを求めたくなってしまう。
誰でもそうだろう。
だが言葉だけで行動をしない人間に自分の行動についてとやかく言われるのは腹が立つ。

「口だけのドへたれ野郎にそんな事できる訳ねーだろ。」

「し、失敬な。」

「いつも口だけで何一つ実行しようとしていない。何を根拠に旅に出るだ、爺さん婆さんとの出会いを

楽しむ、だ。目の前の物事にも対処できないような奴が何ぬかしてんだ。」

喉に熱気がこもり不快感が増していた。

この不快感を早く体内から吐き出さないと脳まで回ってきてしまう。

「それを会議しようってさっきから言ってるんじゃないかさぁ・・・。」

身体が前に項垂れながらも日向岡は顔を上げて俺を見る。勘弁してくれよって表情だ。

「だがお前はどうせこの会議を活かせないだろ。」

そりゃそうだろ、と俺が心の中で言う前に万田がこぼした。

「活かすさ・・・。」

「声が小さいんだよ。」

「関係ないだろ。」

「自信が無いっていう表れだろ、てめーには無理だ。現時点でできてないんだからこれから先も絶対にできない。できるって言うならとっとと実行に移せノロマ。」

「それでできたら苦労しねーよ。」

「しろよ馬鹿。」

「何をすればいいんだよ。」

「告ればいいじゃん。」

「むっ、無茶を言うなよ。」

「できるだろ。しろよ。」

相手は目の前にいる訳だが、日向岡は目視せず俯いていた。

「思い立ったらすぐ行動すればいいだけの事だ、それは簡単にできる。俺はそうしている。俺は常に自分の気持ちに素直に動いている。」

「お前は素直すぎるって。」

「居場所の無い学校を抜け出す事の何が悪い。」

「だからって一人旅を、それが理由でやれるような奴はそうそういないぞ。」

「ここにいるって言ってるんだよ。そしてできている。できるんだよ。論より実行って言葉があるだろ、そういう事だろ。できる事だって分かっているから踏み止まろうかどうか考えたりするんだ、可能という事実さえ出ていれば考えるのは時間の無駄だ。やらなかったらやらなかったでそのままずっと後悔するのは目に見えている。やりたいと思えるから考えられる。」

それならやれよ。と言おうと思ったが自分がとても長く語っている事に気づき口が止まった。

自分にしてはとても珍しいと思った。胸の中でグルグルと回り、溜まっていたものが吐き出たのか、声もいつもより少し高く、大きかったような気がする。喉も少し痛い。

「中学二年生にここまで言われた気分はいかがなものでしょうか、会議の主催者の日向岡さん。」

「ぐぅ・・・。」

沈んだ日向岡の顔を出縄が恐る恐る覗った。
日向岡は何も言い返せないというよりも考える事を放棄しているように見えた。
視線を落とすも目は俺の言葉に対し苛立っている。
俺の言い分が正しいと分かっていても確かにそのハードルは高いものに感じる。
そもそもこの場に告白したい相手がいるという時点で。
だがいてもいなくても日向岡は不安を盾にして決戦を先送りにしていくだろう。
リスクが最小限になる時まで待ち続けるだろう。そんな時は来ないと思う。

「ま、まあまあ、そう気を落とさず・・・」

「中学二年生にボロクソ言われた・・・」

「ドンマイドンマイ。」

日向岡がどんどん沈んでいく。
変なところで妙に強気で、その癖ヘタレで浮き沈みが激しすぎるナイーブな男の頭を出縄が撫でて励ます。

ヘタレの日向岡は照れた顔を隠せず、顔を伏せた。

「ちっ、良かったなリア充めが。」

万田が後ろではやし立てる。棒読みだが。

「うるせーよ耕太郎。」

「羨ましいだろう耕太郎。」

照れ隠しをする日向岡に出縄が続いた。

「別に羨ましくないから。」

「へぇ、これでもか？これでもか。」

そう言いながら、俺達に見せ付けるように出縄は両手で日向岡の頬を軽くぺちぺちと叩き、すり、頭へと手を戻し、髪の毛をクシャクシャにした。

「うぐ、うぐぐ。」

もうこれは遊ばれている領域だが当事者はとても満足そうだ、笑みが口からこぼれている。

「そんなに甘やかしといていいのか、出縄。」

「やっぱり羨ましい？」

「躾を疎かにすると手に負えなくなるぞ。」

「ちょ、俺は犬って事かよ。」

日向岡がようやく顔を上げた。そしてまるで犬のように吼えた。

「え、犬でしょ？」

出縄さんが犬扱いを容認！？

「なんでもう確定しているんだよ犬って！」

「はいはい、いい子いい子。」

「うむぅ。」

出縄が撫でて日向岡を封じる・・・日向岡はまた顔を伏せた。それでいいのか日向岡。

「・・・前進してるうちに入れていいのだろうか、あれは。」

「ああ・・・。」

万田と二人、後方へ下がって縮小して作戦会議。

はたしてこの恋愛作戦会議、大成する日は来るのだろうか・・・言葉にしなくてもまず勝ち負け以前の問題に見えるのだが。

１―９　灰色の鎧を纏った巨人（前書き）

ようやくロボット要素が出始めるという物語の構成の悪さ

１―９　灰色の鎧を纏った巨人

と、俺達が呆れた様相を見せる、少し捻くれた友人役を演じた時であった。

甲高い音が聞こえた。
大きくも小さくもなく、だがとても目立つ音が聞こえた。
風が木々の葉を揺らす音、どこからともなく聞こえてくる鳥の鳴き声とは違う音が、山の音の上を通過して耳へと伝わってくる。
音は何重もの山の音をすり抜けて俺の頭の中を震わせた。
何かの機械だろうか。
だが山の中に何の機械を持ち込むのだろうか。
道路が近くにある所まで俺達は登ってきたのだろうか。

「なんだ？この音。」

日向岡が音を探して辺りを見回した。
当然俺達を囲っているのは木と草花だけだ。
それに木々の向こうも暗くて見えない。
音は間違いなく近づいてきている。
甲高い音が押し寄せてくる。
甲高い音の次に物凄く低い音も聞こえてきた。
今度は足元が揺れたような気がした。
甲高い音と低い音が上下から来る。
左からか。
俺が向くのと同時にその場の全員が左を向いた。
音は大きくなっていく。

「歩いてる、エーディーエーか？」

エー・・・ディー、エー？

万田の口から聞きなれない言葉が当たり前のように放たれた。
斜に構えている事で有名な冷めた少年が、エーディーエーなんて固有名詞があたかも存在するかのように。
中二病なんて言葉は真っ先に嫌うような男だぞ。
しかも歩いてるってなんだ。
交互に聞こえる甲高い音と低い震える音は確かに足音のように聞こえなくもない。
低い震える音が地面を揺らしている。
だが甲高い音は間違いなく機械の音に違いない。
鉄と鉄が擦れ合うイメージが頭の中にすぐに沸いてくる。

「なんでこんな山の中にエーディーエーが？」

日向岡が万田の予想に疑問を投げかける。
なんだよエーディーエーは山の中にいちゃいけないものなのか。
人が歩くような道じゃない所にいる俺達も俺達だと思うんだけど。
エーディーエーさんに人権は無いのか。
って機械音出しているものに人権ってなんだ。

「もしかしたら俺達、何処かの組織の領域に踏む入れてしまったのかもしれん・・・。」

「ちょ、や、やめろよー・・・そんな事言ってホントにリベリオンとかの拠点があったりしたらどうするんだよ・・・。」

日向岡の中では組織と言ったらリベリオンなのか、こいつらはさっきから一体どこのローカルトークをやっているんだ。

聞きなれない機械音はますます大きくなってきている。

「まだアトゥギにリベリオンの勢力は来れていないはず・・・エーディーエーだとしたら偵察、でもこんな山の中で・・・？」

出縄まで真剣な顔つきで何か言い出した。
なんですかこれ、男女間でも使えるホットな話題か何かなんですか
エーディーエーって、何ですかリベリオンって。
アトゥギではそういうの流行っているの？
かれこれ二週間この街にいるのだが、一度もエーディーエーなる単語を俺は耳にしていない。
何この流行、突発性なんですか。

「おいお前ら、さっきから何なんだよエーディーエーって。」

「エーディーエーだよ。」

日向岡に疑問を投げかけるも俺には理解できない返答がきた。

「それが何なんだよ。」

「それが何ってヤバいだろ、こんな所でエーディーエーと鉢合わせだぞ。」

薄っすらとだが日向岡が青ざめている。
青ざめ方がおかしい。
なんて顔していやがるんだ、こいつが真面目な顔をするのはどこか滑稽に思えるのだが、こんな不安さを全開にした表情をされると、何かがおかしいと感じる領域になる。
滑稽だとかネタにしてはいけないような迫力がある。

「もっと具体的に言えよ。まず物なのかよ。固有名詞かよ。何なんだよ。」

「いや、だから・・・」

ガサッ、太い木の枝が誰かの手ではらわれて揺れる音がはっきりと聞こえた。
機械音の主が来たのだ。

「エーディーエーだ・・・。」

俺が機械音の主の姿を見たのは万田が言葉を発そうとしたが目の前の状況に動揺して予想以上に小さくなってしまったと思われる小ささの声で呟いたのと同時であった。
幾つもの木の枝が灰色の箱みたいなものを遮っている。
しかし視線を落とすと灰色の箱は二方向に形が分かれていた。
まるで人の足だ。
だがまた灰色の箱を見上げてみると、木々の間から灰色の箱がちょうど頂点みたいな位置から光を点している。
箱の上に小さい箱が付いたようなところで周囲の木に付いているどの葉よりも明るく、緑色の光を横一線に放っている。
発光している部分はまるで目かセンサーのようだ。
日曜日の朝にやっているヒーローの顔に似ている。
顔が付いているって事は、よく見てみればこいつは人の形をしているじゃないか。
腕もしっかりと二本付いている。
灰色の鎧を纏った巨人だ。
周りの木々よりは少し劣る大きさだが威圧感は十分にあった。
日向岡達が怯えるのも分からなくもない気がする。こいつは俗に言

うロボットって奴なのかもしれない。
教科書に載っているような工場で使われている物とは大違いだが、こいつこそがロボットらしく思える。灰色の肩、膝、頭に塗装された青色のラインが一般人の期待するようなロボットらしさをアピールしている。
こいつを街中に出してみろ、大体の人はこいつをヒーローだと認識するだろう。
ちびっ子達が見たら憧れを抱く事だろう。

というか、何だよこれは。

１―１０

そもそも人型のロボットなんていつの間に完成していたのだろうか。
これは何なんだ、どこの誰の兵器なんだ。
自衛隊が作ったのか。
こんな山の中に何しに来たのだろうか。
日向岡、万田、出縄が皆その場で固まっている。
視線が灰色の巨人に釘付けだ。
これがエーディーエーなのか、左肩に入っている０８という数字の上に、小さい英文字が見える。ＡＤＡ―０１。
エーディーエーと書いてある。
あれが、日向岡達が音を聞いただけで青ざめるエーディーエー。
俺にはヒーローのように見えるぞ。
体が感じているのは恐怖ではない、体を震わせている感情は憧れだ。
創作の世界を意のままに駆け巡る主人公の後ろ姿を追うのと同じものだ。
こいつはロボットだ、こいつに乗れたらさぞ面白いだろう。
別の世界が、別の物語が始まる事だろう。
あのロボットのコックピットに乗ったとしよう、そこから見える世界は戦いの世界に違いない。
戦う為に命を使って世界を見るんだ。
このロボットは俺の知ってる世界には存在しない。
こいつは世界の境界線だ。
コックピットから世界を見ればわざわざ住家を飛び出るなんて滑稽な話になる。
こいつに乗る事が叶うのなら。

「すげぇ。」

木の陰でくすんだ灰色の顔から緑のラインを光らせる。
中に乗っている人がＡＤＡに息を吹き込んでいる。
緑のラインが俺達を捉え、両腕が機械とも人とも似つかない動きと音を立て、左腕を横に広げて、甲から細長く黒い筒が飛び出した。
それを右手も使って支えながら一度天へ掲げ、俺達の方へと銃口を下ろした。
デカい。
この穴から出てくる物が俺の体に当たったら、どんなに俺の体が屈強だったとしても全身の複雑骨折はまず確実だろう。
そもそも俺の体の恰幅よりも遥かに大きい。
直撃はしなくても、すぐ傍に飛んできたら風圧で体を持ってかれそうだ。
それが今、俺達に向けられている。

『そこを動くな！』

声がスピーカーに乗ってロボットから放たれた。

「ひぃっ！？」

日向岡が悲鳴を上げる。
万田と出縄も声にこそはしなかったが後ずさりをした。

『一つでも変な行動をしてみろ、お前達は一発で肉片を辺りに撒き散らす事になるだろう。そうなりたくなければ、手を後ろに組み、大人しく・・・』

「で、出縄っ！」

「え！？」

とっさに日向岡が出縄の手を取り、脅迫を無視して銃を構えたまま微動だにしないＡＤＡの両足の間へと走り出した。
銃口が向けられていると言っても、その銃筒は長く、取り回しが良いようには見えなかった。
ＡＤＡの隙間を目掛けて、日向岡が出縄を引いて走る。

「ば、馬鹿！　ひゅーが！」

万田が日向岡の行動を咎めるも、日向岡は振り向く事すらせず止まらなかった。

『お、おいこら待て！　何故そこで逃げる選択肢が出てくるんだよ！？』

ＡＤＡからスピーカーに乗って声が出る。
ＡＤＡの足の間を通り抜ける日向岡達を追うように頭が後方へ回転した。
正面からその様を見ている俺達にヒーローとは到底思えない滑稽な姿を晒した。

「うおおおおおお！」

叫び声を上げて日向岡がＡＤＡの向こう側へと走る。ヘタレが勇気を振り絞って行動を起こしている。まるで意中のヒロインを連れ出して危機からの脱出を図るヒーローだ。

「戻って来いひゅーがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「こんなところでぇぇぇぇぇ死んでたまるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「馬鹿ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

万田の静止とＡＤＡの重圧を振り切り、ヒーローはヒロインの手を引き森の奥深くの暗闇へと消えていった。

『くそっ、止まれって言ってんだろ！』

馬鹿でかい銃声が俺の耳を押し潰し、辺り一体を震えさせた。
ＡＤＡが後ろに回った頭部から煙を吹き、黒い閃光みたいなものを空に向かって飛ばした。
威嚇射撃みたいなものだろうか。
黒い閃光は日光を遮る木々の葉のカーテンを裂いた。
あまりもの銃声の重さに両耳を手で押さえていないと頭をもっと強く振らされそうな恐怖に駆られた。だがそれでも両手を貫通して頭の中が銃声で何度も何度も揺れている。

「何なんだ、何なんだよこの状況は・・・！」

万田が怒鳴り声が度重なる銃声にかき消されたのを感じた時、銃声がようやく止んだ。
ＡＤＡの頭部は再びこちらの方へ回転して緑のラインの光る顔を俺達へ見せた。
かと思うと今度は腹と思われる位置の縦に長いでっぱりが上に開いた。
コックピットだ。
ロボットのフロントに開く扉があったらそれは間違いなく操縦席だ。
どんな田舎者でもすぐに判断できるだろう。
あれには人が乗っている。
山を歩いていた学生に銃を向け、逃げる学生に威嚇射撃を行った人

が。
今コックピットを開けて出てくる。
自衛隊か？　アメリカ軍か？　それともどこかの秘密結社のエージェントか。
スピーカーの声は特に違和感の無い普通の日本語だった。
今現在通りすがりの学生に銃口を向けたままの軍人、アメリカ人、エージェントのいずれかが、俺達を脅迫して一体何をするつもりだろうか。
やはりＡＤＡというのは一般人に見せてはいけない機密情報なのか。
そんなもので山の中を歩くなよ。
歩く機密情報じゃねーか。
だが俺からしてみればこのＡＤＡが国家機密のトップシークレットだったとしても、学校に戻って誰かに言いふらしたりするような事は多分しないだろう。
これは情報という言葉で捉えるにしてはとても役不足を感じる。
これを人に言葉で伝えるにしては言葉の数が足りなくなる。
ほんのページをちぎって持って帰って人に見せるなんて非常に乱雑な扱い方が許されない、いかにも貴重そうな何かの生物の皮で包まれた艶のあるとてもとても大きく太く、重い本は丸ごと持っていくのが信じられない事に本でありながら不可能だ。
これを断片だけ話したとして、同じ感情を抱いてもらう事も不可能だ。
俺達の前に立つＡＤＡは、ここにいる俺と万田、さっきまでいた日向岡と出縄しかそれを受け取って説明する事ができないものだ。
本が自ら歩いて俺へとやって来た。
そんな事は絶対にありえないから誰も俺のこの感情を言葉で理解できるはずがない。
自分以外を理解するにはその人物と同一の存在になるしか方法は無い。
それを不可能だと知った人はなるべく対象に近づこうと距離を縮め

ようとする。
だが距離のとり方を知っている人、できる限り近づこうとする人は共に滅多にいない。
そもそも人は情報を既に十分に頭の中に収納していてその情報を使って日常生活を営んでいる。
情報の棚の中に該当する物の無い外の物が日常生活に必要あるかどうか、それを判断するのに大きく関わるのは今までに得た情報だ。
今までその外的情報を持たずに生きてきたという事実を持つ情報の棚は例えばいじめの被害を受けている人、毎日1人でいる人を見たとして、それを助ける事、関わる事を必ずしも必要な事ではないという事を必ずそう捉える。
相手が必要としてこない、変わろうとしないからこちらがわざわざ行動を起こす必要は無いと解釈する。
人が弱者を助けるか助けないかの要因は事実でなく感情である。
どんなに非道な事態が目の前で不特定多数対個人で起こっていたとしても勇気、利益、介入した場合の有利不利、様々な概念が行動に関与する。
それらの要素を考慮した上で最後は感情が物事を決める。
助けるか無視するか、対象の人間の運命が決定する。外的要因による事態の変動を待っているだけの対象を救済する価値があるかどうかの判断を待つのみとなる。
そしてそこまで思考が至るような人はあまりいない。
ここにいない他人にこの気持ちの完全な理解を求めるのは無意味だ。
この奇跡は人の日常からかけ離れている。
常識に馴染む事の無い違和感を超越した異次元の物体は目を通して脳の奥深くへ隅々と行き渡る。木の葉の影で照らされたＡＤＡが顔の緑のセンサーの光で影を裂き俺を睨んだのが俺にはセンサーは人の目のように意思のあるもので生きているように感じた。
異常である世界へ俺を誘っている。
暗闇の中を一人で駆けた俺の行いを一睨みで褒めもして、哀れんだ

りもしたようだった。
へえ、そこまでやったのか。
そんなに必死にやる必要は無かったのに。
俺という存在があったというのにお前は頑張りすぎた。

1―11

「ったく、恐ろしいもんだよな餓鬼ってのは。何をしでかすか分かったもんじゃねぇ。」

ＡＤＡの腹から左手に何か黒い物を持った白い服と黒いズボンの男が姿を現した。
男は頭をオールバックにしているようで、格好から浮いた色をした赤いカチューシャが俺達に向けられている長い筒の作った距離からでも視認できた。
左手に持っている黒い物は拳銃のように見える。
銃なんて精々エアガンぐらいしか見た事は無いが、こんなＡＤＡに乗っておいて手に持っている物が玩具だという事は無いだろう。
だが白い服はよく目を凝らして見ると学生の着るＹシャツであった。
体の線もそれほど太くは無く、見れば見るほど彼は学生の年頃のように思える。
シャツをズボンから出し、浮いたカチューシャを付けたオールバックは軽いナルシストに目覚めた現役の高校生そのものだ。
ナルシストっていうか、かくいう俺もシャツを出しているので似たような物を感じたのだ。
だが顔つきは通りすがりの学生を見る目つきにしては感情を持ちすぎているんじゃないかってぐらい、鋭く、俺達の僅かな動きも見逃そうとしない。
もしかしたら欠伸をするだけで銃弾を飛ばしてくるんじゃないか。

「お前達は一体何者だ？　どうして学生が真昼間にこんな山の中を歩いているんだ。」

ロボットの腹から学生らしき赤カチューシャの男は銃を片手に俺達

へ問いを投げかけた。

「ＡＤＡって言うんだろ、それ。どうやったらそれに乗れるんだ。」

「ガキが好奇心で乗っていいもんじゃないぜ、こいつは。こいつは戦う為に必要な武器なんだからな。」

赤カチューシャが肘はそのままで銃口を空に向け、ＡＤＡの頭部へ視線を移した。

「どうしてお前みたいなのがそれに乗っているんだ？　あんた、学生だろ。」

「こんな所を歩いているようなガキと大体同じような理由じゃないかと俺は推測しているんだが、どうかな。」

視線を俺達へ戻した赤カチューシャは少ない会話だけで随分すんなりと警戒を少し解いてくれたようであったが、どうしても頬はピクリとも動かない。

「気まぐれで乗れる代物には見えないけどな。」

「俺の場合は偶然だな。俺にはお前らみたいなガキが毎日日課の如くこんな山の中を歩いているとは思えない、だが山を登る趣味までを気まぐれという括りにして否定するつもりはない、冒険ってのは少年の浪漫の代名詞だからな。」

「ホント、どうして草木掻き分けてまでしてこんな山の真っ只中にいるのかね。自分でも不思議だ。」

「でも満更でも無いだろお前、さっきからこのイズモ改に視線が釘付けじゃねーか。」

灰色に青いライン入ったのＡＤＡの面は俺達の方へ構えたままである。

さっきからずっと俺の事を見たままピクリとも動かない。常識外の異様な存在の方から俺へ幾度もアプローチを仕掛けてきている。

「イズモ改って、そのＡＤＡの名前？」

「出雲って言ったらＡＤＡの最初期の奴だ。」

ボソリとだが、万田からようやく声が出た。さっきからこいつは全然言葉が出ていない。

「どっからどう見てもこいつは出雲にしか見えねーだろ。なんだお前、興味があったのは出雲じゃないのか。」

パイロットは拍子抜けしたかのように声のトーンを落とした。

「いや、興味はとてもある。どうしてそんなものがここにあるんだ。一体どこから持ってきた。」

「なら等価交換をしようじゃねぇか、お前らは一体何者だ。ここにいるのは浪漫を求めてなのか。」

「俺らは見た通りでごく普通のどこにでもいる、浪漫を求めて流離う学生だ。」

元々は日向岡が企画した、この山に登った事には計画性も何も無く行き当たりばったりなのだが、日向岡が提案した山菜狩りはぶつける勇気を出せない男子学生の恋愛感情をいかに上手く、気を楽にして相手に伝えるかの会議である。
男子の恋愛相談は学生時代の浪漫の一つだと言えなくもないものだろうと俺は思った。
小説、漫画、アニメ、ドラマ、映画、紙や画面を通して映る世界ではどこでも学生は誰かに思いを募らせている。
その誰かと思いを募らせている張本人の2人が現在この場にいない訳だが、浪漫を求めていた一団がさっきまで形成されていたのだからきっと大体合っているだろう。
流離うというのは日向岡達の行動に対して言いすぎた表現かもしれないが。
まあ現に俺は流離っている身だしこれも合っているだろう。
求めている物は決して日向岡みたくヘタれた恋愛感情の他力本願による成就などでは無いが。
とっとと自分で相手に言ってしまえばいい話なのにわざわざ人を集めて回り道の方法を探させるような真似を俺がするなど断じて無い。
窮地だろうとなんだろうと、完全に事態を解決できるのは自分の力のみだ。
他者は当事者ではない。
だから根本のところまで手を突っ込む事はできない。
それぐらい誰だって知っているはずだ、俺より3、4歳も年が上ならば当然分かっているはずだ。
他力本願なんて許さない、流離うなんて大層な言葉を借りて動くのなら尚更、自分の力で進まなければならない。

「そうかやはりな、いいぜお前ら、驚かして悪かった。さっきのアベックどもにも伝えておいてくれ。」

赤カチューシャは拳銃をズボンのポケットにしまい、敵意をほぼ完全り解いてくれたようだ。
相変わらず硬いままの表情を除いて。
「あいつらはアベックじゃないけどな。」
万田はまだ出雲というＡＤＡを意識しているのか、声に張りは無く、赤カチューシャに届きそうにないボリュームで言葉を発した。

１―１２

そんな万田の言葉を聞き流し、俺は出雲とやらに近づいてみた。
俺達に向けられたままの銃筒を左に避け、コックピットの方へと視線をやって歩く。
出雲に近寄ると生暖かい、見えない煙みたいなものが顔面に満遍なく張り付いた。
近づいてみると、首を上げなければならない大きさが俺の知ってる常識と比較してどれだけ異様な物かが分かる。
腕もあり二足歩行、そしてなにより山に生えてる一本の木程の大きさの物体をどんな動力源で動かしているのか、この生暖かいモヤモヤと漂っているものがあるのは少し大きいバスやトラックと似ているが、それらがここまで排気ガスを充満させる事は無い。
ロボットの割には随分と非超常的な臭いだ。

「ＡＤＡ―ＴＫＢ０１プラス、出雲改。後継機からすっかりリストラされちまった頭バルカン、左腕６０ｍｍ長射程ライフルを持ってる上に、こいつは最新鋭のサツキからパーツを流用してるからな。ただのお古だと思ってもらっちゃ困るぜ。」

赤カチューシャが俺の知らない単語を交え、出雲改を紹介した。

「サツキってのは上位互換って事か。」

「ＴＫＢシリーズの最新型の上に自衛隊だって使ってるだろ、皐月は。」

自衛隊だって使っているだって？
こんなあからさまなオーパーツとも言える代物を？

現に目の前に存在しているのだから軍隊が極秘に隠し持っていてもおかしくないが、だが赤カチューシャ以外に万田も出雲というＡＤＡを知っていた。
日向岡も女子である出縄も知っていた。
こいつらはどっからどう見ても文句無しで普通の高校生のはずだ。
だが俺はＡＤＡというロボットを自衛隊が持っているなんて聞いた事が無いし、そもそも人型二足歩行の大型ロボットの開発が成功したのなら世界的な大ニュースになるはずだ。
ＡＤＡって一体何なんだ、まさかアトゥギ市限定のローカルメカか、こんなの一度も見た事無いしそんな馬鹿げた話があるはずない。
あいつらが知っていて、赤カチューシャは乗っていて、俺がＡＤＡの存在を知らない理由が分からない。
こんなのを見たのはここに来て初めてだ。
これを当たり前のように学生が扱っている、知っている、怯えてさえいる。
どうなっているんだ、俺がおかしいのか？
いくら中学生の癖に生活を投げ出して一人で特にこれといった準備もせず野宿をしながら旅をしたからって俺が社会の流行にこんなにも乗り遅れるなんてありえない。
新聞テレビラジオなんか見なくたって、こんなものが出たら誰でもすぐに存在に気付く。
百パーセント社会現象になる。

「それにしてもお前、やっぱりスパイとかでも何でも無いんだな。いくらなんでも疎さが露骨すぎるぜ。」

赤カチューシャが腰に手を当て、呆れたように言う。

「スパイって何のさ。」

「そうだな、俺は自衛隊もリベリオンも信頼していないが、学生服を着ている奴ならまずはリベリオンに属しているかどうかを疑う。奴らの支持層ってのは日本では考えられないぐらい、異常なまでに幅広さを持っている。お前ぐらいのガキだって平気で銃を扱っている、恐ろしいもんだぜ。」

どこの国の話だよ。日本はいつから紛争地域と化したんだ。

「ちょっと待ってください、あなたは一体何なんです。リベリオンじゃないんですか？」

万田がようやく出雲に近づき、赤カチューシャに恐る恐ると発言した。

「俺はリベリオンなんかじゃねぇ。」

赤カチューシャの声調が、俺達の前に姿を現した時のような強さに戻った。はっきり否定した。

「じゃなきゃどうしてＡＤＡを。あなたみたいな人が自衛隊なはずがないし。」

「言ったろ、偶然だって。必然であってたまるか。」

この出雲は誰がどう見ても戦争の為の兵器にしか見えない。
これで建築用とか作業用とかの類だと弁解するのは不可能な身形をしている。
それが自衛隊に置かれているとなれば尚、学生服の少年が乗っているのは不可解な話になる。
リベリオンがどうのこうのってのはサッパリ分からないが。

リベリオンだったら学生が乗っていてもありえるみたいな言い方だが、これもＡＤＡと同じように少なくともアトゥギ市では誰もが知っているワードなのだろうか。

「よく分からない人ですね、偶然拾ったとでも言うんですか。」

「必然だったら何なんだ・・・ただの高校生が人を殺すのが当然の事なのか、そんな事は決してあっちゃいけねえ。リベリオンだってそうだ、あいつらは根本が腐っている。あんな奴らに黙ってやられたくなんかない。あいつらのやっている事を、俺は許さない。あいつがいなければ、俺なんかが・・・」

その時、木々を震わす地鳴りが赤カチューシャの言葉を裂いた。

赤カチューシャの出雲が近づいてきた時と同じような重い音だが、その音は幾つかの同じ音と重なり合っているように聞こえる。山の震えが出雲の時よりも遥かに大きい。

「ちっ、無駄話をし過ぎたか・・・！」

赤カチューシャが轟音の聞こえる方向を睨んで、出雲の腹に飛び込んだ。

１―１３　勝つに決まっている

「万田、まさかこの音って。」

「ああ、マジで今度はマジモンかもしれない・・・！」

『おいガキ共、早くここから逃げろ！　今すぐ遠くへ走るんだ！』

出雲のスピーカーから赤カチューシャの声が出て、顔の緑色のセンサーが再び発光し、体勢を整え始めた。

「あんたはどうすんだ。」

『レーダーには自衛隊のＡＤＡが二機映っている、俺がさっきまで相手をしていた奴らだ。』

赤カチューシャがスピーカー越しで伝えた。ＡＤＡには索敵機能があるようだ。

「いや待て、自衛隊ならどうして？　味方じゃないのか。」

『奴らはこっちの話を聞いちゃくれねえ、問答無用で攻撃してくる！　リベリオンの息の吹き返し方が尋常じゃないから、恐らく口封じにするつもりだ！』

「どうして！」

『情報統制だ！　外からの情報は都合が悪いんだ！』

「外って、一体何が起きているんだよ！？」

『起きているってのに自衛隊がこの様だ！　俺はこんな所で死ぬ訳にはいかない、なんとしてでも有楽町へ直訴しなけりゃならねぇ！　ここで俺は奴らを叩き潰し、捕虜にして自衛隊共へ突きつけてやる！　ここより後ろへは絶対に奴らを行かせねえ、お前らは引き返して逃げな！』

出雲が音の方を向き、歩き始めた。

「ま、待てよ！　相手は二機いるんだろ、勝算はあるのか！？」

自衛隊がＡＤＡを戦車や戦闘機と同じように運用しているとしたら、相手はプロという事になる。
片や赤カチューシャは学生だ、ＡＤＡに乗ったのに事情があったとしても分が悪いのは目に見えている。
それにさっき赤カチューシャは、自衛隊は皐月とかいう最新鋭のＡＤＡを使っていると言っていた。
そして出雲にはＴＫＢ－０１という刻印がなされている。
数字からして出雲は一番最初に出たＡＤＡなのだろう。
初期型の機体とプロの操る最新型二機、何か策でも無い限り文字の上では赤カチューシャが勝つのは絶望的だ。
自衛隊は問答無用で襲ってくるとも言った、
出雲が破壊されてしまったら運良く生き残っても捕まってしまったら赤カチューシャは・・・

『勝つに決まっている！　だからお前らは逃げろ！』

スピーカーに乗った赤カチューシャの怒鳴り声が耳に満遍なくぶつかり、振動させる。

『俺の見たところ、リベリオンは着実に戦力を充実させてきているぜ。見た事の無いＡＤＡも見た。前々からキョーカワ村に陣取っているにも関わらずアトゥギに攻め込まないのも、アトゥギ奪回を重要視しているからだ。』

「！？　う、嘘だ、キョーカワ村ってすぐそこじゃないか！　そんなところまでリベリオンが来ているだなんて、そんなニュース全く聞いていないぞ！」

万田が出雲に向かって否定を求めるかのように叫んだ。
キョーカワ村は万田の言う通り、アトゥギ市のすぐ上にある、神奈川県唯一の村だ。
山間部に位置するその村は、ちょうど俺達が立ち入った山の麓を通る道をもう少し歩けばすぐに入れる。
すぐそこにある村に、リベリオンがいる・・・？
リベリオンが何なのかは分からないが、少なくとも歓迎されない怪しい悪の組織だと言うことは今までの会話の中から容易に察する事ができる。
支持層が広く、賛同者は学生でさえも武器を持ち、ＡＤＡも所有する、自衛隊と敵対する組織がすぐそこに、この近くにいる。
二週間住んでいたアトゥギ市のすぐ近くに、そんな危ない組織がずっといたのか。
しかもアトゥギ奪還って何だ、アトゥギにどんな魅力を感じて戦力を配備していやがるんだそいつらは。
ＡＤＡやらリベリオンやら自衛隊やら、どうなっているんだアトゥギ市。

『こんな事が知られたら大パニックになるだろーな、だから情報統制したいんだろう。だがこんな事、放っておいていいはずがない。

今すぐにでも全戦力を持って叩くべきことを、何故か自衛隊は渋っている。だから俺が動かさなけりゃならない、無能の政治家共の前にこいつで訴え出れば嫌でも政府は動かざるを得ない。俺はそれに賭ける。』

「そんな・・・」

『もしだ、もし俺が万が一、ここで死ぬ事になったら、死んだら、チャンスがあったらでいい、身に危険が及ばない確立の高い消極的な手段でもいい・・・この事を世界に伝えてくれると嬉しい。』

「何っ。」

「ま、」

万田がそう言いかけた瞬間、重い音と共に風圧が体に押し寄せた。それも一つや二つではなく、黄色い光みたいなものが何発も出雲を通り越して俺達の頭上を飛んだ。

「ヤバい、逃げるぞ貴則！」

黄色い光を見て、貴則が慌てたように出雲のいる位置から離れようとする。轟音は俺達をここから追い出すかのように押し寄せ、木々の向こうからは黄色い閃光、その奥には二本の緑色の光が不気味に光っていた。
出雲と同じ、ＡＤＡのセンサーか。
出雲は閃光に対し左右に何度も移動しながら木を盾にするかのように接近していっている。
俺達から距離を離すつもりだ。

・・・そう言えば日向岡と出縄はどうなった。
日向岡が出縄を引っ張って走った方向は出雲がやってきた方角だ。
自衛隊のＡＤＡ二機は俺達が進んでいた方向から着々と姿を現しつつある。
出雲とは異なり、木々の陰に隠されても体は白い光沢を失っていない。
真っ白で純白な白色のはずなのだが、今出雲の向こうに見えている二機のＡＤＡの色からは普段白色が持っているようなイメージを抱く事ができない。
あのＡＤＡの塗装は白色なんかじゃない、真っ黒には全く見えないがその色としか思えない。

「・・・って、何見てるんだ貴則！　早く逃げるぞ！」

後退していた万田が立ち止まって振り向き、俺を呼んだ。

「日向岡と出縄はどうするんだよ。」

「え、あ・・・いや、でも今から探しに行くのは・・・逃げれてるのを祈るしかないだろ今は。とにかく俺達も早く逃げないと。」

「あの、赤カチューシャはどうなるんだよ。あいつ、このままじゃヤバいんじゃないのか。」

視線を出雲の方へ戻す。
出雲は木の間を移動しつつ頭部のバルカンを飛ばしている。
が、敵の片方が銃撃を止め、ライフルらしきものを腰に付け、代わりに銀色の輝きを放っている細長い得物を取り出し、こちらへと出雲目掛けて突進してきた。
ドシン、ドシン、ドシンと地面が揺れた。

1―14

『くそっ！　こっから先は進ませるかよ！』

得物を持ってる相手に対し、出雲は引く様子を見せず、装甲で対抗しようと右腕を構えた。
赤カチューシャは本気で俺達を巻き込まないつもりみたいだ。
そして日向岡と出縄の方向にも誘導しようとせず、この場で押さえ込もうとしている。
だがシールドも無しに、武器を持っている相手に立ち向かおうとすれば普通にただじゃ済まない事になるのは目に見えている。

『その機体じゃ壁になる事すら役不足なんだよ！』

『なんだと！』

出雲へ向かって走る白い機体は女の声で叫び、金属が目いっぱい伸びる音を立て木々の彩る陰を飛び越え、出雲の頭上へ舞った。
少しタイミングが遅れて出雲が頭部のバルカンを空を舞う白い機体へ向けて放ったが全て当たらなかった。
山の奥からはもう一機の白い機体がライフルの銃口を構えたまま銃撃を止め、チャンスを見計らっているかのようにセンサーを輝かせている。
一機の近接戦闘が失敗しても後ろから狙撃をする魂胆なのだろう。
赤カチューシャにとってはこの位置で事を終わらせるのは非常に困難な状況だ。
武器を出せなければ逃げ場も無い。

『賊如きが何度も何度も、鬱陶しいんだよ！』

白い機体が右手に持っているのは槍であった。左手を槍へ添え、天を指していた槍を出雲へ勢い良く振り下ろした。
高い音を立てて二機の間に火花が飛び散る。
出雲は右腕で受け止めようとしたがやはり無理があった、腕は肘まで持っていかれてしまった。

『とっとと動いてればまだ少しは生き長らえる事ができたものを。何を画策していたのかは分からないが、やはり盗人風情では私達の相手は務まらないようだな。』

『武器を丸腰で防ぐだけの馬鹿がいるもんかよ！』

槍を振り切った白い機体に出雲は腹へ蹴りを喰らわせた。不意打ちを喰らった白い機体は後ろへと体勢を崩した。

『！？　小癪な！』

赤カチューシャは右腕を犠牲にして格闘戦を仕掛ける隙を作ったのだ。
そして出雲が立て続けに白い機体へ接近し左手で頭部を掴みにかかった。

『潰れろ！』

『この、小汚い悪魔の手下の分際で！』

体勢を直せていない白い機体は槍を構える暇もなく出雲に頭部を掴まれ、捨て台詞みたいなものを早々と吐いた。
盗人からの手下へいつの間にかランクが変動している。

メインカメラらしき頭部を破壊して相手の視界を奪えば戦いは相当有利となる。

『ですが、このぐらいで茶番劇は終わりです。』

男の声と共に木々の奥から閃光が一つ、二つ三つ飛び出し、そのうちの二つが出雲の左肩に当たり、灰色の塊が飛び散った。
瞬く間に頭を鷲掴みしていた左手は開かれ、白い機体を解放した。
敵は一機だけじゃない、後方にも敵が銃を構えて隙を覗っている。
赤カチューシャが出雲一機だけで勝算を出すのはもはや無理に等しくなった。
右腕を切り落とされ、左肩の装甲に被弾した型遅れのＡＤＡに対し、白い機体二機は鬱陶しいぐらいに白色がテカテカとしている。
出雲に蹴られた方の機体は腹付近の装甲に大きめの凹みが見受けられるが、それでもなんの支障も無さそうに立ち上がり、刃先を出雲へと向けた。

『援護が遅いぞクエスト3、そんな様ではいざという時に困る。』

『フレンドリーファイアよりはマシでしょう、クエスト1。』

蹴りを貰った白い機体が銃を構えたまま森から出てきた機体に文句を吐いた。
クエストというコードネームで呼び合う彼らが悠然と出雲の前に並び立つ。
この状況、完全に不利だ。戦いの最中に余裕そうな怠慢な態度を見せ始めたが、こっちからしたら恐怖以外の何物でもない。
こっちが何をしようとしてもあいつらには通じる気配が無い。
出雲とクエスト二機では動きが全然違っている。
初期型の出雲ではやはり歯が立たないようだ。

それも手負いの状態では尚更、逃げようとしても立ち向かっても勝ち目が無い。

「貴則っ、いつまで見てる気だよ！？」

万田の顔がますます青ざめている。
確かに早く逃げないと死ぬ。
あの白い卵もどきが気色の悪い緑色のセンサーをこちらへ光らせたら最後だ、奴らはどこまでも追って来てしまいそうだ。
木々の並ぶ暗闇の中を右往左往に山の奥へと走って逃げても奴らはその手に持っている、腰にかけている銃を取り出して俺達を木々ごと銃撃して吹き飛ばすことだろう。
あいつらには余裕がある、どんな手を打ったとしても赤カチューシャは負ける。

1―15

『ところで・・・さっきから気になっていたんですが、そこにいる人達はどうします、クエスト1。』

俺達は存在を気付かれたら終わる。
赤カチューシャの言った事が本当に真実なのならば、軍が存在を抹消しようとした外から来た赤カチューシャと会話をした、姿を目撃しただけでも俺達は消されてしまうのではないか。
アトゥギのすぐ近くにリベリオンとかいう危険な組織が迫ってきていて、アトゥギ市内にどこの馬の骨か分からないＡＤＡが侵入できるような状態だという事を知ってしまったごく普通の学生の俺達を、自衛隊は見逃すだろうか。
万が一で俺達は何も知らない、戦闘を目撃しただけで出雲のパイロットとは会話も何もしていないと試しに弁明してみたとしたら、俺達をとっ捕まえた自衛隊は俺達を快く解放してくれるだろうか。
そんな気はしない、俺達はもう赤カチューシャと顔を合わせ、言葉を交わした。
嘘をついても見透かされそうだ。
赤カチューシャは学生だった。
袖をまくり裾をズボンから出したＹシャツと日向岡ぐらいの身の丈、黒髪をまとめた赤いカチューシャといった身なりは間違いなく学生のものであった。
身なりと言葉遣いはほぼ確実に学生だったのだが、彼の表情だけは日向岡達と同年代の少年とは思えなかった。
日向岡や万田は顔つき以外にも発言といい今日みたいに行動といい、どこか幼さを醸し出しているのだが、赤カチューシャの顔は幼さが無ければ大人のような凛々しさも感じない。
日向岡の少し幼げな面は気が抜けているようで、中身も優柔不断な

ヘタレだ。
万田はいつも硬い表情を作って本音を隠そうとしているが最終的には物事に年相応の反応を示してボロを出す。
だが赤カチューシャの表情には何も無い。
頬は凍ったように張り、目は一切泳いでいなかった。
あいつは俺に情報を与えるどころか、逆に中を透かそうとするかのように俺達をじっくりと観察していた。
言葉と表情が一度も一致する事の無かった彼は、今俺達の目の前で白卵もどきと戦っている。
彼は表情ではなく行動を俺達の目の前で起こしている。
そういう男だという事を、知らないと嘘を付ける自信が無い。
あいつの行動に嘘を付く事もできない。
銃を持った白卵の緑色のセンサーの光が俺の目の中に入ってギラギラと反射した。

「や」

万田が口を開けたが言葉が一文字で途切れた。
万田が口を開いたのと同時にもう一機の白卵が俺達を見つけた。

『ああ、見てしまったのか・・・学生が、不幸な事に。』

『そうです、本当に残念ながら。これを見られてしまったからには、このまま黙って見過ごす訳にはいきませんよね。』

人に向けるには大きすぎる銃口も金属の擦れ合う音を立てて、ついにこちらを向いた。
ヤバい。
ようやく万田のしている顔色と同じ感想を抱いた。
これは死ぬ。

今少しでもこの場から離れようとしたらすかさず白卵の銃弾が飛んできて、地面ごと俺達は肉体をごっそり抉られ四方八方へ吹き飛ばされる。
直撃しなくても地面へ衝突した衝撃は生身の人間にとってはとても大きいものになるだろう。
で、ここで大人しく白卵達に捕まったら俺達は赤カチューシャと会った事を見逃されない。
外から来た所属不明のＡＤＡがアトゥギ市に入った事を知られるのは自衛隊にとっては本当にマズいみたいだ、だから二機とも揃って、彼らにとってのイレギュラーへ戦闘の最中であるにも関わらずセンサーを向けたという事以外に理由があるだろうか。
この場から逃げ出しても、大人しくしていても、俺はここで終わる。
あの穴から弾が飛んできて俺に風穴を空ける。
弾は胸を開き、肺や心臓を１秒もかからずに跡形も無く破裂させる事だろう。
心臓が砕け散る痛みを脳が走馬灯をスローモーションで流しながら俺に体の隅という隅まで感じさせて、１秒で済む苦しみを何十秒にも何百秒にも生きる為に引き伸ばすんだ。
そして痛みを完全に理解してやっと、俺という人間は形を失ってこの山の一部になるんだ。
血も肉も、骨も、元が何だったのか分からない液体も血と混ざって赤色に染まり、そこにある木の幹には芯まで、土壌には草の葉の葉緑体を突き抜けて染み付き、俺は人ではなく俺であったものとなり、そしてこの山の一部となる。
だが俺が山の一部になるのかと考えてみるとそう思えない。
俺の体は山となるが、俺は一体どうなる。
痛みを骨の髄まで味わって、それでどうなる。
大自然と一体化するなんて穏やかそうな気持ちに包まれるか。
痛みを終えた後に何が待っている。
今日俺はこの山菜狩り兼恋愛対策作戦会議とかいう山登りを終えた

ら、また学校のキングルームへ戻って、そこにはどうせいつもみたいに希乃以外に日向岡や万田とかも屯って、夜の校舎で全力かくれんぼ！　全員見つけるまで眠れま１０！　なんてパクってミックスしてどうするんだというレベルの訳の分からない遊びをやらされて、普通の学生として過ごしていては決して経験する事の無い暗闇が彩る廊下を駆ける事になって、暗闇を自分の意思で駆けていく。
そこに目的は無く、何をしようが何を思おうが自由だ。
じゃあここで俺が見るものは何だろうか、暗闇にフェードアウトするのか、
まっさらな世界にフェードインするのか。
手足失った俺は何があるのか分からない空間へ溶け込んでいく。
自分の意思とは関係無く。
その空間から戻る事はできない。
教室に戻り電灯を三つ全てにスイッチを入れるとそこにはどこから持ってきたのか立派そうな大きくて黒いソファー２つが会議室から持ち出したという白い長方形のテーブルを囲み、その一画の後ろには畳が窓側に向かって敷かれていて、布団やらパジャマやらが散乱していて、寝転がると丁度いい位置にテレビが置かれていて、そこが本来は３０人～４０人程の学生が集まり椅子に座るはずの部屋だという事を忘れさせる。
だがそこは確かに教室だと分かる。
畳やソファーがあろうとも脇にはちゃんと机と椅子が沢山置かれている。
前と後ろにはちゃんと黒板がある。
窓は左側の壁一面に張られている。
そこで俺は希乃と、時には日向岡、万田、出縄、何故か生徒会長も、それと撫子原森子、キングの右腕と自らを称している茶髪の変な男、中原というのもいる、そんな奴らと夜な夜なくだらない事をしながら、時には彼らの起こす事を眺めながら夜を過ごす。
窓の外を覗くと真っ暗闇なのに教室は賑やかである。

逃げるように走り、街を見下ろした時のような胸がスカスカとした苦しさは感じない。
ただ、その時に一人で暗い街中を駆けた事を思い返すと、胸を締め付けていたものが無くなっている事に良い意味で違和感を感じる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8220y/

王様狩りに行こうよっ！

2012年1月6日19時46分発行